HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コルチャックの孤児院ドム・シエロットの設立と歴史的背景
Author(s)	大澤, 亜里
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 120, 53-81
Issue Date	2014-06-30
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.120.53
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56425
Type	departmental bulletin paper
File Information	AA12219452_120_53-81.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

コルチャックの孤児院ドム･シエロットの設立と歴史的背景

大　澤　亜　里*

【要旨】 本稿の目的はヤヌシュ・コルチャックが院長を務めた孤児院ドム・シエロットの設立過程について，当時ロシア支配下にあったポーランドワルシャワの児童保護活動の文脈の中に位置づけながら明らかにすることである。本稿から以下の点が指摘できる。第一に，ドム・シエロット設立母体である“孤児救済”協会は，ロシア革命以降，多数の民間団体が組織された時期に設立された。第二に，19世紀後半から20世紀初頭にかけて乳児施設*1や保護施設*2，技術教室*3や裁縫教室*4といった通所型施設が設立された。しかしこれらにおける部分的な保護ではなく，コルチャックは子どもの生全体を保障することが必要だと考えドム・シエロット設立に関わるようになった。第三に，ドム･シエロットは当時のワルシャワの孤児院と比較して，子どもを理解しようとした点，子どもが主体的に，共同して生きることを目指した点，個の生活を保障しようとした点で特徴的である。

【キーワード】コルチャック　ドム・シエロット　ワルシャワ　児童保護活動　孤児院

1. はじめに

(1) 先行研究の検討と課題

本稿はヤヌシュ・コルチャック（本名ヘンルィク・ゴールドシュミット，1878-1942年）が院長を務めたユダヤ系の孤児院ドム・シエロット（孤児の家，1912-1942年）の設立過程について，当時のポーランドワルシャワにおける児童保護活動の文脈の中に位置づけながら明らかにすることを目的とする。本節ではまず日本およびポーランドにおけるコルチャック研究を概観し，その課題について述べる。

ヤヌシュ・コルチャックは，ポーランドがロシア，プロイセン，オーストリアの三国によって分割され独立を失っていた時代，ロシア支配下にあったワルシャワに生まれたユダヤ系ポーランド人[1]である。20世紀前半におけるポーランドの教育家を代表する一人であると同時に，作家，小児科医，孤児院の院長，社会活動家として幅広く活動した。1942年8月，ナチス・ドイツによるホロコーストの犠牲となり，ドム・シエロットの子どもたちと共にその生涯を終えた。

戦後，コルチャックはその死が悲劇的かつ英雄的であったとして，ポーランド内外で注目された。また彼の代表的な児童文学作品や教育学的著作は数ヶ国語に翻訳され，現在に至るまで広く読まれている。現在，国際コルチャック協会には24カ国が加盟しており，程度の差はあれ，世界各国で彼の思想を学ぼうとする動きがある。

日本においては，彼の著作の翻訳書はほとんど存在しないが[2]，1990年以降に伝記を通して活発に行われた人物紹介や[3]，A.ワイダ監督の映画『コルチャック先生』の公開により，コルチャックの名が広く知られるようになった。また近年では，1989年に採択された国連子どもの権利条約の成立に影響を与えた人物としても注目されている[4]。このような動きを背景に日本

* 北海道大学大学院教育学院・博士後期課程

では，コルチャックは貧しいユダヤ系の子どもたちに献身した，あるいは子どもの権利を主張した“偉大な”人物として語られてきた。そのような中で，彼の思想をより深く理解しようとする研究者が現われてきた。

塚本智宏はコルチャックの著作，「19世紀隣人愛思想の発展（Rozwój idei miłości bliźniego w XIX wieku）」（1899年），『子どもをいかに愛するか（Jak kochać dziecko）』（1918年，1920年），「理論と実践（Teoria a praktyka）」（1925年），『子どもによる教育者の教育（Wychowanie wychowawcy przez dziecko）』（1926年），『もう一度子どもになれたら（Kiedy znów będę mały）』（1925年），「感性（Uczucie）」（1927年），『子どもの尊重される権利（Prawo dziecka do szacunku）』（1929年）―これまで“子どもの権利の尊重”と訳されてきたが，正しくは“子どもの尊重される権利”であり，現在では，このように研究者の中で理解されている―をもとに，彼の子ども観や教育思想，子どもの権利思想の理解を試みている（塚本 2004，他）[5]。また近年ではそうした思想の歴史的形成過程を明らかにする研究に取り組んでいる。その中で，コルチャックが学生時代に主張した“子どもはすでに人間である”という信念が，その後もゆらぐことなく貫かれたことを明らかにした（塚本 2011）。さらに彼の子どもの権利に関する主張がどのような歴史的背景のもとでなされたのかについても明らかにしようとしている[6]。

石川道夫は，ドイツのダウンツェンロート（Douzenroth, E.）やハインペル（Heimpel, E.），バイナー（Beiner, F.）などによるコルチャック研究を引き合いに出しながら，コルチャックの著作，特に『子どもをいかに愛するか』（1918年，1920年）と『子どもの尊重される権利』（1929年）をもとに彼の教育学について検討している。その中で，やはり“子どもはすでに人間である”という立場を一貫して持っていたことを明らかにしつつ，彼の教育方法の中には「子どもの良い点も悪い点も，いずれをも考慮に入れた人間の弁証法的な考察の仕方がある」と述べる（石川 1997a）。また，コルチャックの『ただ一人神と―無信仰者の祈り（Sam na sam z Bogiem-Modlitwy tych, którzy się nie modlą）』（1920年）をもとに，彼の宗教的態度とそこからどのように教育的な活動が根拠づけられて出てくるかについても検討している（石川 1997b）。

小田倉泉は，コーヘン（Cohen, A）やボルノウ（Bollnow, O.F.）の他，多数の英語圏の研究を引用しながら，また，コルチャックの著作『子どもをいかに愛するか』（1918年，1920年）や『教育の瞬間（Momenty wychowawcze）』（1919年），『マチウシ王一世（Król Maciuś Pierwszy）』（1922年），『もう一度子どもになれたら』（1925年），『子どもの尊重される権利』（1929年），『ゲットー日記（Pamiętnik）』（1942年に執筆，発行は戦後）といったコルチャックの著作をもとに彼の子ども観について明らかにしている。その中で，コルチャックは子どもの「現在」を重視していること，子どもは尊敬に値する人格であるという信念を持っていたこと，ありのままの子どもを知ろうとしていたことなどを指摘している（小田倉 2002，他）[7]。また博士論文では，「①コルチャックの思想形成の過程を，その生と思想的背景とのかかわりの中で捉え，思想的基盤を明らかにしていくこと，②幼児教育学の立場から，コルチャックの子ども観を構造的に明らかにしていくこと，③実践の教育学的意義を考察することによってコルチャックを教育学研究の対象として位置付けること，④コルチャック教育学の今日的意義を元に教師教育論構築を目指すこと」という課題に取り組んでいる（小田倉 2005）。

このように少しずつではあるが，彼の思想が明らかにされつつある。しかし，コルチャックの思想と彼が長年院長を務めた孤児院ドム・シエロットにおける実践を結びつけて論じられることはこれまでほとんどなかった。日々の実践の内省から生まれたコルチャックの思想を

理解するためには，彼の活動拠点であったドム・シエロットやそこでの実践に着目することが必要であると考えるが，そもそも実践に関する研究は極めてまれである。

日本では伝記による断片的な紹介[8]と，塚本智宏がコルチャックの権利思想に着目しながら“仲間裁判”について紹介・分析したもの[9]，そして小田倉泉がドム・シエロットの取り組みの一部である“新聞”や“掲示板”，“郵便箱”，“仲間裁判”，子どもの“議会”を紹介しながら，それらの教育的意義について検討したもの[10]しか存在しない。

ポーランドにおいては，ユネスコがコルチャック生誕100周年を記念して「コルチャック年」と定めた1978年，コルチャックの思想と業績に対して最も注目が集まった（大澤 2012）。それ以降も数多くの研究が行われ，中でも彼の伝記研究は多数存在する。次いで多いのは，コルチャックの子ども観や養育・教育観，養育者観など，彼の思想に着目した研究であるが，それらのほとんどはコルチャックの著作を引用しながら，直接そこに現代的意義を見出そうとしている。日本ではほとんど手をつけられていないドム・シエロットにおける実践に関する研究も少なからず存在する。ドム・シエロットおよびコルチャックが共同運営者・専属医として関わったポーランド系の孤児院ナシュ・ドム（私たちの家，1919-1945年）の実践について，特に文化的活動に着目しながら研究しているマティヤス（Matyjas, B.）は，コルチャックの養育システムは「何よりも，子どもや子どもの発達，必要の充足，自己教育の準備に役立つ」とポーランドの最新の教育学百科事典に書いているが，これが実践に関する多数の研究の一般的な評価と言える（*Encyklopedia* 2003：799）。これらの研究のほとんどは，コルチャックの著書*Jak kochać dziecko：Dom Sierot*（子どもをいかに愛するか）（1920年）に依拠するところに終始している。この著書には1912年から1914年までと1918年から1920年まで[11]のドム・シエロットでの実践，つまりそこでとられていた養育システムについて書かれている。そのため，明らかになっているのは一時期のドム・シエロットの様子であり，設立後30年間を通してドム・シエロットの運営およびそこでの実践がどのように変化していったのか，それを通してコルチャックの考えはどのように深められていったのかについては明らかにされていない。

また日本およびポーランド両国におけるこれまでのコルチャック研究は，当時のポーランド社会，特に児童保護問題に関する状況についてほとんど言及することなく，歴史や社会的文脈を無視してコルチャックの思想や仕事を評価してきた。コルチャックが生きた時代，ポーランドはロシア・プロイセン・オーストリアによる分割・支配の時期（1914年まで），第一次世界大戦期（1914-1918年），それを経て独立を果たした時期（1918-1939年），そして第二次世界大戦が起こってロシアとドイツによって再び占領された時期（1939年以降）を経験しており，国家のあり方とともにその社会状況は大きく変化している。また児童保護問題に関して言えば，19世紀後半から20世紀初頭に多くの慈善団体や社会団体が組織され，こうした団体による児童保護活動が始まり，第一次世界大戦後はそれによる被害の大きさから児童保護に対する関心が一気に高まった。しかし，従来の研究のほとんどはこうした実態，歴史的背景を明らかにしないまま，コルチャックの仕事を紹介，評価してきた。

以上のような日本およびポーランドにおけるコルチャック研究の現状から，①孤児院ドム・シエロットにおける実践と結びつけてコルチャックの思想を理解すること，②1912年の設立から1942年までの30年間を通してドム・シエロットの運営およびそこでの実践がどう変化していったのか変遷を追うと同時に，それによって深められたであろうコルチャックの子ども観・養育観の歴史的変遷について明らかにすること，③それをポーランドにおける当時の児童福祉

や教育，社会の歴史的文脈の中に位置づけて評価することが必要であると考える。

筆者はポーランド留学時代にコルチャックの著作*Momenty wychowawcze*（教育の瞬間）（1919年）の翻訳に取り組み，それを通して彼がどのように子ども観察を行ったのかを垣間見た（塚本・鈴木 2008）。またワルシャワ大学で執筆した修士論文*Teoria i praktyka pedagogiczna Janusza Korczaka-system wychowawczy w Domu Sierot i Naszym Domu*（ヤヌシュ・コルチャックの教育理論と実践―ドム・シエロットおよびナシュ・ドムにおける養育システム―）（2010年）では，ドム・シエロットおよびナシュ・ドムにおける“養育システム”に着目して，その意義やコルチャックの思想の理解を試みた（Suzuki 2010）。また「サマーキャンプと青年コルチャック―子ども集団との初めての出会い―」では，ドム・シエロットの院長になる以前に参加したサマーキャンプ（夏季コロニー）における養育実践について，そこでの経験を記した*Mośki, Joski i Srule*（モシキ，ヨスキ，スルレ）（1910年）や*Józki, Jaśki i Franki*（ユスキ，ヤシキ，フランキ）（1911年），*Jak kochać dziecko. Kolonie letnie*（子どもをいかに愛するか―サマーキャンプ編―）（1920年）などをもとに明らかにした（大澤 2011）。その中で，サマーキャンプで試みた子ども観察や，“キャンプ裁判”，“係り仕事”，“好感度評価”などの取り組みを通して，彼が“子ども社会”に気づいたことを指摘した。

今後，1912年のドム・シエロットの設立から第一次世界大戦までの時期，第一次世界大戦期，戦後ポーランドが独立を果たした1918年から第二次世界大戦までのいわゆる戦間期，そして第二次世界大戦期におけるドム・シエロットの実態およびコルチャックの思想について順次明らかにしていくが，本稿ではその前段階であるドム・シエロットの設立過程に限定して考察する。

(2) 本稿の目的と方法

以上に述べたように，本稿はドム・シエロットの設立過程について明らかにすること，またそれらを当時の児童保護活動の文脈の中に位置づけることを目的とする。

日本にはドム・シエロットの設立過程に関する研究はなく，伝記で“孤児救済”協会が設立したとの言及があるだけである（近藤 1995：54）。また，そこではコルチャックが「家庭と学校が一つになったホームの設立」を夢見ていたとされているが，その出典は確認できない（近藤 1995：55，近藤 1990：58）。アメリカのジャーナリスト，劇作家，小説家であるリフトン（Lifton, J.B.）による邦訳された伝記では，“孤児救済”協会の主要メンバーであったエリアスベルグ（Eliasberg）夫妻とコルチャックの関係について言及されている（リフトン 1991： 63）。またウィーン生まれの児童文学作家であるペルツ（Pelz, M.）は，コルチャックの伝記の中で，ドム・シエロット設立以前に“孤児救済”協会が運営していた孤児院について言及している（ペルツ 1994：51-53）。しかし両者とも，“孤児救済”協会がどのような団体でどのような活動を展開していたのかについては触れていない。またこれら伝記における記述は出典が不明なため，史料にもとづいて明らかにすることが必要であると考える。

ポーランドにおいては，“孤児救済”協会の主要メンバーでドム・シエロットの設立および運営にも携わった活動家のエリアスベルゴーヴァ（Eliasbergowa, S）や，ドム・シエロットの養育者として働き，戦後はコルチャック研究の第一人者でもあったレヴィン（Lewin, A），ドム・シエロットの実習生でありコルチャック研究者でもあったメルジャン（Merżan, I）がその設立過程について言及している。エリアスベルゴーヴァは設立の経緯やコルチャックとのやりと

りなどを詳細に回想している（Eliasbergowa 1946：236-238）。レヴィンはコルチャックが孤児院事業に関与するようになった要因やどのような構想を持っていたのかについて分析している（Lewin 1999：256-260）。メルジャンはコルチャックが他の慈善団体ではなく“孤児救済”協会を選んだ理由について分析した後，ドム・シエロットの建設およびコルチャックの構想について簡潔に記している（Merżan 1982：84-85）。レヴィンとメルジャンは共に“孤児救済”協会の年次活動報告書とドム・シエロット開設式典でのコルチャックのスピーチが掲載された同協会出版の冊子*Ku otwarciu Domu Sierot*（ドム・シエロット開設に向けて）（1913年）を参考にしている。これら三者による記述からドム・シエロットの設立に関しては概ね知ることができる。しかし，“孤児救済”協会の規模や活動内容などは明らかにされておらず，また当時ワルシャワにあった孤児院に関する記述もない。ドム・シエロット設立の意義やその特徴を明らかにするためには，こうしたことを明らかにする必要があると考える。

そこで本稿では，ワルシャワにおける当時の児童保護活動および孤児院の実態，また“孤児救済”協会の活動を明らかにする。さらに設立時のコルチャックの構想がどのような形で実現しつつあったのかについても見ていく。そしてこれらを通して，ドム・シエロット設立の意義やその特徴について検討する。

研究史料としては，ドム・シエロットの設立母体である“孤児救済”協会（Towarzystwa “Pomoc dla Sierot”）の定款*Ustawa Towarzystwa “Pomoc dla Sierot” w Warszawie*（1907年）と1910年から1914年までの年次活動報告書*Pamiętnik Towarzystwa “Pomoc dla Sierot” w Warszawie*，またドム・シエロット開設式典でのコルチャックのスピーチが掲載された同協会出版の冊子*Ku otwarciu Domu Sierot*（1913年），そしてポーランド語によるユダヤ系日刊紙*Nowa Gazeta*を主に活用する。“孤児救済”協会の定款は1907年，1926年，1936年の三度出されているが，ここでは1907年にワルシャワ県の協会および同盟リスト№99に登録された際作成された最も古いものを参考にする。年次活動報告書は1910年から1938年まで毎年発行され会員に配布された。掲載項目は年度により多少異なるが，序文，ドム・シエロットの活動報告，街頭の子どもの保護委員会の活動報告，理事会および各委員会の名簿，医者および歯科医の名簿，収入および支出，財産の状況，予算案，寄付および寄贈，会員名簿からなる[12]。新聞*Nowa Gazeta*には1909年から1917年にかけて，ドム・シエロットに関する記事が合計16掲載されたが，ここではその内，1909年から1913年までの設立に関する記事のみを参考にする。

上記の史料以外に，“孤児救済”協会の設立当初からその活動に積極的に関わり，コルチャックとも親交があったエリアスベルゴーヴァの回想録や，実習生“ブルシスタ”としてドム・シエロットに関わったメルジャンの著作なども参考にした。

また19世紀後半から20世紀初頭におけるワルシャワの児童保護問題や，慈善団体および社会団体といった民間団体の活動に関しては，現代の研究を参考にしながら，第一次世界大戦前に出版された史料をもとに明らかにする。主な史料は，外国およびワルシャワの児童保護施設について，医師や法律家，教育家らが執筆した*Niedole dziecięce*（子どもの悲運）（1882年），貧困母子保護協会の活動を中心に，児童の保護をめぐる動きについて法律家モルデンハヴェル（Moldenhawer, A）が執筆した*O opiece u nas nad dziećmi*（私たちのところにおける児童保護について）（1890年），ワルシャワの慈善施設について書かれたグロトフスキ（Grotowski, Ż）の*Rozwój zakładów dobroczynnych w Warszawie*（ワルシャワにおける慈善施設の発展）（1910年），児童保護問題について言及した医師シェナイフ（Szenajch, W）の*Zasady organizacji*

opieki nad dziećmi（児童保護組織の原則）（1917年）である。その他，当時の雑誌等に掲載された史料も活用する。

こうした史料をもとに，第一に，19世紀後半から20世紀初頭におけるワルシャワの児童保護活動の状況はどのようであったか，また既存の孤児院にはどのような特徴があったのかを明らかにする。第二に，孤児院の院長になるまでのコルチャックの活動と“孤児救済”協会の設立過程およびその活動内容，そしてドム・シエロット設立に至る経緯について明らかにする。第三に，ドム・シエロットの建設から完成までの状況を概観した後，コルチャックはドム・シエロット設立時にどのような構想を持っていたのか，またそれをどのように実現していこうとしたのかについて考察する。

2．19世紀後半から20世紀初頭におけるワルシャワの児童保護活動

(1) 公的・私的救済事業をめぐる状況

19世紀，他の西欧諸国が経験したようにポーランドでも資本主義の波を背景として都市化，工業化が進んだ。ワルシャワでは人口が急激に増加し[13]，劣悪な環境のもと低賃金で働く労働者や失業者，また貧しさゆえに働きに出る女性労働者の数が増加した。こうした状況の中，19世紀後半にはそれまで以上に，孤児や棄児，浮浪児など，生活の困窮から親の養育を十分に受けられない児童の保護が課題となった。

イギリスを始めとする他の西欧諸国では，こうした児童の保護は国家あるいは地方自治体と，これらから補助金を得るなどした民間の団体が担っていた[14]。しかし周知のように，ポーランドは18世紀末の分割以降ロシア，プロイセン，オーストリアの支配下にあり，国家はこうした問題に対応することができなかった。そのため慈善団体や宗教団体，専門職団体といった民間の団体が国家あるいは地方自治体に代わって対応せざるを得なかった。しかしこれら民間団体も各々の支配国の圧力を受けていたため，十分に活動を展開できたわけではなかった。地域により支配国の影響は様々であったが，ロシア支配下にあったポーランド最大の都市ワルシャワではどうだったのだろうか。

1832年以降，ワルシャワはロシアに実質的に支配されるようになった[15]。その年に出されたロシアの法令により，民間団体の管理・監督を行う機関として中央保護評議会（Rada Główna Opiekuńcza）と特別評議会（Rady Szczegółowe）が置かれた[16]。ただこれらの評議会のもとでは，民間団体はロシア政府の支配をさほど受けることなく活動することができた。しかし1863年から1864年まで続いた一月蜂起の後，ロシアの支配が強化され，1870年6月に出された法令より，ワルシャワの民間団体は内務省に直属する公的慈善市評議会（Rada Miejska Dobroczynności Publicznej）の管理・監督下に置かれた[17]。その結果，民間団体は組織および運営面においてかなりの制約を受けることになった。また国や地方自治体からの補助金などはなく，活動資金を寄付などに頼っていたため，財政基盤は脆弱かつ不安定であった。

このような状況の中，ワルシャワ慈善協会は19世紀を通してワルシャワで最も精力的に活動を展開し，児童保護分野においても大きな役割を果たした。この協会は，ロシア皇帝を国王とするポーランド立憲王国設立以前の1814年に，伯爵夫人であるゾフィア・ザモイスカ（Zofia

Zamoyska）を中心とする貴族階級の人たちによって設立された。その目的は“物乞いを無くし，（救済を：大澤）受けるに値する本当に不運な人々に仕事と援助”を与えることであった。設立当初は，貧しい人たちのための施設を運営し，物乞いの根絶に従事する部門と，治療および天然痘の予防接種や，貧しい妊婦の保護に携わる医療部門の2部門があった（Podgórska 1970：144-146, Mazur 1999：20）。児童保護問題に関しては，1817年から貧しい人や老人，身体障害者のための施設に孤児を収容するという形で携わっていた。1838年に児童保護部門ができ，それ以降，孤児および貧困児の保護活動はワルシャワ慈善協会の活動の中で重要な位置を占めた（Podgórska 1970: 162）。その後も協会は活動領域を広げ，1891年の定款改正時には16の部門が置かれた。その内，児童保護に関するものは孤児院部門と，保護施設および乳児施設部門，技術教室および裁縫教室部門，無料読書室部門の4部門であった（Grotowski 1910：190-193）。会員は貴族や聖職者の他，医者，弁護士，資本家といった富裕層など様々な立場の人たちからなり[18]，その数は1890年頃までは1000人を下回っていたが，1890年代後半には1000人以上となり，1904年には2000人を超えた。このようにワルシャワ慈善協会は規模，活動領域ともに当時のワルシャワにおいて最大の慈善団体であった。

前述したように，一月蜂起が失敗してからロシア革命が起こる1905年まで民間団体にとって厳しい状況が続いたが，そのような中でも児童保護に取り組む新しい民間団体が設立された。その例としてワルシャワサマーキャンプ協会と貧困母子保護協会があげられる。ワルシャワサマーキャンプ協会がロシア政府によって正式に認められたのは1897年であるが，それ以前の1882年から医師や公衆衛生士たちによって，貧困家庭の児童の健康回復と心身の発達を保障するという目的のもと，毎年夏4週間に渡るキャンプが実施された[19]（Markiewicz 1882: 14-24）。貧困母子保護協会は，医師や法律家，教育家らによって1880年に計画されたが結局実現しなかった子どもの友協会[20]の目的の一部を引き継ぐ形で，1884年に設立された（Moldenhawer 1890: 9-10）。この協会の目的は，生まれてくる子どもの扶養が困難な臨月および出産後の貧困女性を支援することであった。そしてこの目的を達成するために，妊婦に対する金銭的援助や，妊婦のための施設および乳児を日中預けることができる施設の運営，その他，母親が育てられない場合には慈善家や農村の乳母に引き渡すという活動を行った（Moldenhawer 1890：10-11）。

ワルシャワ慈善協会は活動の一部として児童の保護に携わっていたのに対し，サマーキャンプ協会や貧困母子保護協会は，それを専門とする団体であり，対象および活動内容が限定的であった。これはロシアの支配が強化された一月蜂起からロシア革命が起こるまでの間，ワルシャワ慈善協会のように活動範囲が多岐に渡る団体の設立をロシア政府が認めていなかったからだと考えられる（Szenajch 1917：52）。

これら民間団体による私的救済以外に，宗教教団―例えばユダヤグミナや，プロテスタントグミナなど（グミナgmina：共同体や行政単位の意）―も，貧しい人たちを救済する取り組みの一環として，孤児や貧困児の保護に携わった。

さて1905年のロシア革命の結果，独立とは言えないまでもポーランド人に対する様々な制限が撤廃され，ある程度の自由が保障されるようになった。そして1906年3月に出された「同盟および団体に関する暫定的法規」により，ロシア政府の了承を得なくても登録するだけで団体を組織することができるようになった（Kępski 1993：220-223）。また広範囲に渡って活動することも可能となった（Szenajch 1917：52）。実際の運用においてはまだ制約や困難さを残しつつも，ロ

シアの圧力が緩和された中で，1906年以降には様々なタイプの団体が多数組織された[21]（Kępski 1993：223）。また経済状況が好転したことにより，既存の民間団体の財政も良好であった（Kępski 1993：242-243）。次章で詳しく述べるが，コルチャックが理事のメンバーとなり，ドム・シエロットを設立することになる“孤児救済”協会も，ロシアの圧力が緩和されたこの時期に設立されたユダヤ系の団体であった[22]。

以上から，ワルシャワにおける公的・私的救済事業をめぐる状況について，他の西欧諸国とは異なり三国により分割・支配されていたがゆえ，ポーランドでは公的救済の余地がなく民間団体による私的救済に頼らざるを得なかったこと，しかし国や地方自治体からの補助がなく財政基盤が脆弱であった上，支配国の圧力を受けていたため，民間団体の組織・運営は制約されていたこと，そして1905年のロシア革命以降はその状況が好転し，多数の民間団体が組織され，その活動も活発になったことが指摘できる。

では，実際にどのような児童保護活動が民間団体によって行われていたのだろうか。次節では先にあげたワルシャワ慈善協会の児童保護に携わる部門の内，孤児院部門を除く3部門の活動について概観する。

(2) 貧困児のための通所型施設

ワルシャワ慈善協会（1814-1950年）には，孤児院部門，保護施設および乳児施設部門，技術教室および裁縫教室部門，無料読書室部門という4部門が児童の保護に携わっており，その名称通り，孤児院，乳児施設（żłobek），保護施設（ochrona），技術教室（sala pożytecznych zajęć），裁縫教室（szwalnia），そして無料読書室（czytelnia bezpłatna）を複数運営していた。ここでは孤児院を除く5タイプの施設について概観する。

乳児施設は，両親が共働きあるいは何らかの理由で日中に世話をすることができない貧困家庭の3歳までの乳幼児を預かる所であった。1858年に最初の乳児施設ができたが，その後閉鎖と開設を繰り返し，その数は増えなかった（Podgórska-Klawe 1970：179）。その理由としてマズル（Mazur, E）は，乳幼児の保護が難しいことや高い死亡率，母親に幼い子どもを預ける習慣がないことをあげている（Mazur 1999：85-86）。その後，医学や公衆衛生が発展したこともあり，20世紀初頭にはその数は少し増加し，一番多い時期で5の乳児施設があり，合計約300人が登録していた（Grotowski 1910：235-237）[23]。しかし，マズルは実際に利用したのはそれよりもかなり少なかったと指摘している（Mazur 1999：85-86）。

保護施設は，主として3歳から7歳の幼児が通う施設で，1839年に最初の保護施設がつくられた。その後少しずつ増加し，20世紀初頭には約40の保護施設があり，合計7,000人近い幼児が登録するなど，広く普及した施設であった（Grotowski 1910：234-235, Podgórska-Klawe 1970：164-170, Mazur 1999：86-88）。保護施設では絵を描いたり，物を作ったりする他，年齢に応じて簡単な読み書きや体操，宗教について学んだ。このように保護施設は貧困家庭の幼児が学べる唯一の場所であったと同時に[24]，食事や衣服も支給したため，その活動は高く評価されていた。

これら年少者を対象とした乳児施設や保護施設に対し，技術教室や裁縫教室は年長児童を対象とした施設であった。最初の技術教室は1897年につくられ[25]，1900年代の初めには11ヶ所となり，1000人以上の男子が利用していた（Grotowski 1910：229）―ケンプスキ（Kępski, Cz）によると，1887年に最初の技術教室がつくられ，1901年時点で11ヶ所，全体で285人が利用していたという（Kępski 1993：167）―。ここでは7歳から14歳の男子が，大工や鍛冶，金具業の他，革

製品やわら製品の作成，靴の仕立てといった職業教育とともに，国語，算数，製図，宗教などの一般教育を受けていた（Grotowski 1910：226-227, Podgórska-Klawe 1970：183, Kępski 1993：166-167, Mazur 1999：103-104）。これに対し，裁縫教室では，7歳から14歳の女子が裁縫，料理，洗濯，アイロンがけといった家事仕事の他，体操，音楽，図画などを学んだ（Grotowski 1910：230-231, Podgórska-Klawe 1970：179-183, Kępski 1993：165-166, Mazur 1999：100-102）。1882年に最初の裁縫教室が設立され，1902年時点で13ヶ所あり，全体で1000人以上の女子が利用していた（Grotowski 1910：230, Podgórska-Klawe 1970：183）。

これら貧困児のための保護施設や技術教室，裁縫教室は，義務教育がなく学校教育が有料だった時代に，利用料を徴収しない教育機関として機能していた。またロシア政府によって制限されていたポーランドの歴史や文化，言語などに関して学習する“秘密教育”の場でもあった[26]（Lepalczyk 1988：16-17, Kępski 1993：164, Mazur 1999：88）。

一方，無料読書室は1860年につくられ，1870年以降に広まったが，ここはロシア政府の検閲により一般には手に入れることができなかったポーランド語の書籍を，貧困家庭の児童に無料で貸し出す場として重要な役割を果たした（Podgórska-Klawe 1970：150-153）。

以上，ワルシャワ慈善協会が所有する貧困児のための施設について概観したが，これと同様の施設はプロテスタントグミナやユダヤグミナなどによっても運営されていた（*Niedole dziecięce* 1882：160-161, 164-165, Grotowski 1910：226-228, Mazur 1999：102-104, 他）。

このように貧困家庭の児童の保護，養育，教育機関として，乳児施設や保護施設，技術教室，裁縫教室，無料読書室が19世紀半ばから後半につくられ，20世紀初頭にかけて普及していった。しかしこれらは，現代の概念でいえば，通所型の施設であったため，食事や衣類の支給があったとはいえ，部分的かつ一時的な保護であり，貧困家庭の児童の生活を完全に保障することはできなかったと言える。次章で見ていくが，コルチャックはこのような部分的な保護ではなく，孤児および貧困児の生活全て，また生きている環境を改善し，正常な発達を保障することを望んだ。それゆえ当時一般に広まった通所型施設ではなく，孤児院事業に乗り出していったと考えられる。そこで次節では，当時の孤児院について概観する。

(3) 孤児院の状況とその特徴

ここでは19世紀ワルシャワに存在した孤児院の内，ワルシャワ慈善協会が運営する孤児院，修道女会が運営する孤児院，宗教教団が運営する孤児院について概観する。史料は，ワルシャワ慈善協会の孤児院については，ポウコティツキ（Połkotycki, W.）が1896年に雑誌“Zdrowie”（健康）に掲載した論文*Domy sieroce*（孤児の家）とグロトフスキの著作を，それ以外の孤児院については*Niedole dziecięce*（子どもの悲運）（1882年）[27]を参考にする。

まずワルシャワ慈善協会が運営する孤児院であるが[28]，男子用と女子用があり，それぞれ1842年に設立された。男子の孤児院には160人から220人，女子の孤児院には80人から140人くらいの児童が入所していた（Grotowski 1910：232-233）。受け入れ時の年齢は3歳から9歳までで，男子は14歳になると職人のもとに出され，女子は16歳になると施設を出て使用人として働くというのが一般的であった。孤児院には遊び部屋や体操室こそなかったものの，寝室や食堂，教室，病人のための部屋，クロークルーム，浴室が備えられていた。また一日4度の食事と季節に合った衣服が支給された他，教育機会も保障されていた。7歳未満の児童は教育者（dozorca/dozorczyni：見張る人，監視する人の意）の監督のもと，遊んだり簡単な学習をした

りして一日を過ごした。それ以上の年長児童については，男子は読み，書き，計算，体操，音楽といった授業の他，職人になるための教育を6時間受け，その後，予習復習を2時間した。女子は4時間の授業を受け，使用人になるために裁縫や洗濯，掃除，台所仕事といった家事仕事に6時間従事した（Połkotycki 1896：88-94）。

愛徳修道女会が運営する聖カジミエシュ孤児院は17世紀につくられた。この孤児院の入所条件はカトリック教徒で，両親が亡くなっている9歳から12歳の健康な女子であったが，空きがあれば貧困家庭の女子も入所することができた。施設には大体100人の女子が居住しており，宗教，読み，書き，計算，裁縫や刺繍，その他あらゆる家事仕事について学んだ。シスターは常に―夜中でさえも―彼女たちの行動を監視していた。施設は清潔で整理整頓されており，食事も充実していたと，史料では評価されている。入所児童は16歳になると，使用人として働きに出るか，家族のもとに戻って貧しい家計を助けるか，養子になるなどして施設を巣立っていった（*Niedole dziecięce* 1882：151-157）。

最後に宗教教団が運営する孤児院であるが，プロテスタントのルーテル派グミナが運営するものと改革派グミナが運営するもの，そしてユダヤグミナが運営するものがあった。ルーテル派グミナは，1846年に貧しい高齢者と孤児のための施設を設立した。入所できるのは福音ルーテルの両親がいない孤児であったが，例外的に両親のどちらかがいない場合や貧困家庭の児童も受け入れられた。施設には男女合わせて約40人が暮らしており，職員は養育および管理の全体方針を決める監督者と男女それぞれの教育者（dozorca/dozorczyni）およびそれぞれの助手，さらに家事全般を担う家政婦がいた。孤児院内での教育活動はなかったが，年少の児童は保護施設に，年長の児童は教区内の学校に通うことができた。史料では，孤児院は児童の生活に適うよう設計されていたが，食事に関しては十分でなかったと指摘されている。児童は堅信礼が行われる14歳まで施設にいることができたが，それ以降は職人のもとに弟子入りするか，使用人として働きに出なければならなかった（*Niedole dziecięce* 1882：157-161）。

改革派グミナの孤児院は1881年につくられた。他の孤児院と同様に，両親がいない孤児を対象としていたが，空きがある場合はそのどちらかがいない児童も受け入れた。ここでも施設内での教育活動はなく，児童たちは教区内の学校に通った。また堅信礼を迎える年齢に達すると，施設を出て職人のもとに弟子入りするか，使用人となった（*Niedole dziecięce* 1882：161-162）。史料はこの孤児院が設立した一年後に出版されたため，その詳細についてはわからないとしている。

ユダヤグミナは1840年，高齢者施設の中に男子のための孤児院をつくった。受け入れ時の年齢は5歳から9歳までで定員は60人であったが，入居者数はその半分程度であった。職員はあらゆる決定を下す監督者と男女の教育者（dozorca/dozorczyni），係員，家政婦，使用人からなった。孤児院では読み，書き，計算，宗教学習の他，職人になるための教育が行われた。史料では，他の孤児院と比べて，後に分けられたが高齢者の施設と同じ建物内に位置するという点で好ましい環境ではないこと，また貧しい食事であったことが指摘されている（*Niedole dziecięce* 1882：162-165）。ユダヤグミナの孤児院では他の孤児院よりも早く，12歳になると施設を出なければならなかった（Mazur 1999：95）。

以上に紹介した当時の孤児院の特徴として，児童は教育者の監視のもと生活していたこと，100人以上が入所していたり，高齢者施設に併設していたりと，無秩序に入り混じった環境で生活していたこと，読み，書き，計算，宗教などを学ぶ機会が保障されていたと同時に，14歳あ

るいは16歳で孤児院を出た後働くために，男子は職人仕事を，女子は家事仕事を学んでいたことがあげられる。当時，「孤児は早くから労働，服従，規律に慣れ，つつましい生活環境に適応するべきだ」と考えられていた（Lepalczyk 1988：19）。そのため孤児院では，教育者（dozorca/dozorczyni）の監視のもと，自立に向けて職業訓練を受けながら，従順で規律正しい生活を強いられていたと言える。ではコルチャックが院長を務めた孤児院ドム・シエロットは，これら当時の孤児院と比べてどうだったのだろうか。次章以降ではその設立過程に焦点を当てながら，ドム・シエロットの特徴について見ていく。

3．ドム・シエロット設立に至るまで

(1) 孤児院事業に着手するまでのコルチャックの活動

コルチャックは34歳の時にドム・シエロットの院長になった。それまで彼は小児科医として経験を積むと同時に，貧困家庭の児童に関わる活動も行っていた。本節では，ドム・シエロットの院長に至るまでに，彼がどのような活動を通してどのような経験をしたのかについて確認しておきたい。

一点目として，学生時代にワルシャワの貧困地区を訪れて，そこにたむろする子どもたちと関わっていたことがあげられる。コルチャックはこの経験を通してワルシャワの貧困児がどのような状況に置かれているのかを理解し，そこでの観察をもとに*Dzieci ulicy*（街頭の子どもたち）（1901年）を執筆した。

二点目として，児童保護に携わる民間団体の活動に参加した経験があげられる。コルチャックはワルシャワ慈善協会のメンバーではなかったが，同協会が運営する無料読書室でボランティアをした（1902年頃）[29]。晩年にコルチャックは「無料読書室での数年間の仕事は豊富な観察データをもたらした」と回想しているように（Falkowska 1989：73），読書室にやって来る子どもたちとの交流を通して，子どもの世界を観察した。

また1900年にはサマーキャンプ協会の会員となり，1904年と1907年と1908年に養育者としてサマーキャンプに参加した[30]。ここで，「バラバラの集団から協力や互いの譲歩，協同作業，そしてまともな意見が必要であるということを理解する社会」（Korczak 1907a：290）を作っていく子どもたちの姿を観察したことは，彼にとって画期的な出来事であった。この子ども社会との出会い，そしてサマーキャンプでの様々な試み[31]は，コルチャックが理想とする施設の構想を描いた作品*Szkoła życia*（生活の学校）（1907-1908年）―これについては次章で言及する―の執筆材料となった。また子ども集団と初めて関わることになったサマーキャンプで「養育実践のいろは」（Korczak 1920a：220）を学んだと述べているように，そこでの経験は彼のその後の養育活動に大きな影響を与えた。

三点目として，チューリッヒ（1899年），ベルリン（1907年），パリ（1909年），ロンドン（1911年）に短期留学あるいは滞在した際，先進的な児童のための施設やそこでの取り組みに触れたことがあげられる。ペスタロッチに憧れていた彼は，医学部生時代に夏休みを利用してチューリッヒを訪れ，学校や小児病院，無料読書室を見てまわり，その素晴らしい環境に感心した（Korczak 1899：180-183）。小児科医時代，ベルリンに一年間留学した際には，乳児医療や発

育不全の子どもの研究について学ぶと同時に，養育施設も訪れた（Korczak 1907b：344-363）。この時の経験を振り返り，「ベルリンの病院とドイツの医学書は私に，私たちが知っていること，そしてゆっくりと順序だって前に進んでいくことを教えてくれた」と後に述べている（Korczak 1920a：210）。約半年間のパリ滞在中にコルチャックが何をしたのかについては明らかにできていないが，「パリは私に，私たちが知らないことや知りたいこと，知らなければならないこと，そして知るであろうことについて教えてくれた」と後に言及している（Korczak 1920a：210）。ロンドンに一カ月間滞在していた時には，フォレストヒルの近くにある学校と孤児院を訪問し，ワルシャワにあるそれらとは異なる様子について驚きを交えながら記している（Korczak 1912：255-259）。このように西欧の先進的な児童のための施設を訪問したことで，コルチャックはそれらをモデルとした孤児院をワルシャワでつくりたいと考えるようになったと言えるだろう。

以上に述べたように，青年期における貧困地区での観察や児童保護活動を担う団体への参加，西欧における児童のための施設の訪問といったことが，孤児院の運営に携わっていく背景にあった。次節では，ドム・シエロットの設立母体である“孤児救済”協会について，それはどのような活動を展開していたのか，またコルチャックはどのような経緯で関わっていくことになったのかを見ていく。

(2)“孤児救済”協会の活動とコルチャックの加盟

1900年に設立されたユダヤ系慈善団体である“同胞援助”協会（Stowarzyszenie Wspieranie Drobnych Kupców, Subiektów i Rzemieślników “Bratnia Pomoc”）[32]は，衣服や食料の供給，金銭的援助や職探し，医療保障を通して貧しい人たちを援助する他，貧しい孤児の保護にも携わった（*Sprawozdanie Zarządu Stowarzyszenia* 1902：349）。しかし年々，保護する孤児の数が増加したため[33]，1907年12月に行われた“同胞援助”協会の総会で，児童保護活動を専門的に担う組織を設立することが決定された。これがドム・シエロットの設立母体となる“孤児救済”協会（Towarzystwo “Pomoc dla Sierot”）である。

“孤児救済”協会の定款によると，協会の目的は，「性別・年齢・出自に関係なくワルシャワに住むユダヤ系の未成年の孤児，また可能な範囲で貧困児童を保護し，生活手段を与えること」であった（*Ustawa* 1907：186）。活動内容は，①衣類・食料・住居の提供および金銭的援助，②医療費や埋葬費の支給，③収容施設や保護施設，孤児院，手工業学校や教育施設に入れること，④職探しや手工業に必要な道具および材料を買い与えること，また製品が売れるように協力することであった（*Ustawa* 1907：186-187）。このような多岐に渡る活動に加えて，資金が増えれば「安価食堂や，喫茶店，住居，孤児院，保護施設，賃労働ホーム，工房，初級コースから用意された手工業学校，読書室，宿泊所，乳児施設，2歳以上の児童のための昼間施設を設立する権利」が協会にあると定款に記載されている。ロシア支配の下では，民間団体は様々な活動を展開することが禁じられていたが，ロシア革命後に出された1906年の法律により，それが可能となったため，このように記載することができたと考えられる。

年次活動報告書によると，毎年200人以上が“孤児救済”協会の支援を受け[34]，保護施設や裁縫教室，学校や手工業学校に通ったり，工場や商店，職人のもとで働いたりしていた（*Pamiętnik* 1910：16-17, 1911：16-17, 1912：22, 1913：29-30, 1914：10-11）。また1910年以降，サマーキャンプも行われた（*Pamiętnik* 1910：17, 1911：17）。

“孤児救済”協会の活動資金は，会員の年会費（4ルーブル）と協会の資金や財産に対する利子，寄付金や現物による寄付，遺産や遺贈物，協会主催の講演会や催しなどによる事業収入から調達した（*Ustawa* 1907：188）。初年度の収入は13,300ルーブルで，その後少しずつ増加し，1912年度は19,750ルーブル，1914年度は26,700ルーブル，1917年度は36,770ルーブルであった（*Dziesięciolecie* 1918）。

会員には性別・出自・地位・宗教の別なく誰でもなることができた。それゆえ信心深い人から世俗的な人，またポーランド人に同化した人から保守的な人まで様々な立場の人たちによって構成されていたが，ほとんどがユダヤ出自であった。初年度の会員数は1508人，1912年度が最も多くて2083人，以降，少し減少し1917年までは1800人前後であった（*Dziesięciolecie* 1918）。

当時小児科医としてユダヤ系児童のためのベルソン・バウマン小児病院に勤務していたコルチャックは，1908年に“孤児救済”協会の会員となり，1909年には理事会のメンバーとなった。そこには，同じ病院の先輩医師でありユダヤ社会の中では慈善家として有名であったイザック・エリアスベルグ（Izaak Eliasberg）―“孤児救済”協会の中心メンバーであり，1913年から1929年まで長年にわたり協会長を務める―の存在，またその妻であり同様に協会の中心メンバーとして熱心に活動していたエリアスベルゴーヴァ（Eliasbergowa, S）の誘いが大きく影響したと考えられる。

またエリアスベルゴーヴァは後に「ロシア政府によって承認され，学校や工房を設立することが許可された，また児童の保護の全体を引き受けている協会の定款がコルチャックを誘惑した」と回想している（Eliasbergowa 1946：237）。コルチャックが理想とする施設の構想を描いた*Szkoła życia*（生活の学校）（1907-1908年）には，工房や宿泊所，乳児施設や保護施設の他，読書室や病院，農場などが描かれている。この作品から，コルチャックは子どもの生や正常な発達を保障すること，そのためにはこのような施設や設備を整えることが必要だと考えていたことがうかがえる。そして“孤児救済”協会の定款の内容から，コルチャックはこの夢を実現する場として，この協会が相応しいと判断し，関わるようになったと考えられる。

(3) ドム・シエロット設立決定

“孤児救済”協会は“同胞援助”協会から独立した時に，そこが所有していた孤児院の運営を引き継いだ。当時孤児院の運営に携わっていたエリアスベルゴーヴァの回想によると，ワルシャワのジカ通りに位置するこの孤児院は，不衛生でひどい養育環境であったという（Eliasbergowa 1946：236）。そこで“孤児救済”協会はこの孤児院を閉鎖することを決定した。そしてグロジスコ（地名）にある建物を賃貸し，1908年，そこに年少の児童を移した。グロジスコの孤児院には40人の孤児がいた。それ以上の受け入れは不可能だとする理事会の決定にも関わらず，その後2人の孤児が入所した（Korczak 1913a：115）。ここから明らかなように，既存の建物では増加する孤児に対応することができなかった。また，以前の孤児院に比べてある程度状況は良くなったものの，近辺には作業所や学校，病院などがなく養育環境としても相応しくなかった。そこで1909年，ワルシャワのフランチシュカインスカ通りに位置する建物を賃貸し，そこに移った。ヨーロッパ風に改装されたその建物は以前よりも広く，新たに10人の孤児を受け入れることができた（Eliasbergowa 1946：237）。

このフランチシュカインスカ通りの孤児院で，後にドム・シエロットの養育主任となるス

テファニア・ヴィルチンスカ女史とコルチャックが出会うことになった。ヴィルチンスカは1886年に裕福なユダヤ系家庭に生まれた。ワルシャワでフレーベル教育を学んだ後，1906年から1908年にかけてベルギーのリエージュの大学で自然科学を学んだ。1909年にワルシャワに戻ったヴィルチンスカは，兄嫁の母にあたるエリアスベルゴーヴァに，フランチシュカインスカ通りの孤児院で無給で働かせてほしいと願い出た（Falkowska 1997：6-7）。エリアスベルゴーヴァによると，ヴィルチンスカは懸命に仕事に打ち込み，後にドム・シエロットで導入される“係り仕事”に取り組んだという（Eliasbergowa 1946：237）。

コルチャックもまたエリアスベルゴーヴァの招待を受けて，フランチシュカインスカ通りの孤児院を訪れた。そこで，“係り仕事”やその他の活動に自主的に取り組んでいる子どもたちの姿に魅了されたコルチャックは，その後何度もこの孤児院を訪問したとエリアスベルゴーヴァは回想している（Eliasbergowa 1946：237）。こうしてコルチャックとヴィルチンスカの二人三脚の仕事は始まった。

フランチシュカインスカ通りの孤児院の定員は，グロジスコの孤児院のそれよりも10人増え50人となったが，それでも入所を希望する孤児が次から次へと出てきた。そのため，より多くの孤児を受け入れることができる建物が必要になった。またこれまでのような「その場限りの支援」ではなく，「孤児たちの養育や教育について考えなければならない」という認識が協会の中にでてきた（*Nowa Gazeta* 1910.4.26. nr188：2）。そのためには賃貸した建物ではなく，こうした目的に適った新しい建物を建てることが必要とされた。そこで協会は1910年，“孤児のための家”を新しく建設することを決定した（*Pamiętnik* 1910：17-18）。これがドム・シエロットである。

このように“孤児救済”協会は，設立当初からワルシャワの街に増大する孤児を目の当たりにしながら，出来る限り多くの子どもたちに，適切な養育環境を保障しようと追求した。その結果がドム・シエロットの設立であったと言える。では実際にどのような建物がつくられ，どのように運営をスタートさせたのだろうか。またコルチャックはその時どのような思いを抱いていたのだろうか。

4．ドム・シエロット開設に際して

(1) 建設から完成まで

“孤児救済”協会は設立のための資金を集めるために，協会の活動報告書を通して会員に呼びかけると同時に，新聞などを利用して一般市民からも寄付を募った。このようにして1910年度に集まった寄付金41，750ルーブルで，クロフマルナ通り92番地の土地を同年5月に24,000ルーブルで購入した（*Pamiętnik* 1911：18-19）。その同じ年，エリアスベルグを長とし，コルチャックおよびその他の理事のメンバーからなるドム・シエロット建設委員会がつくられた（*Pamiętnik* 1911：17-18）。建設委員会は設計図のコンクールを行い，そこでヘンルィク・スティフェルマン（Henryk Stifelman）をドム・シエロットの設計者に選んだ（Korczak 1913a：118）。有名な建築家であった彼は社会活動家としても名が知られており，数多くの民間団体の施設を設計した（Wojnowska 2008：342）。何度も修正・改善された設計図をもとに，1911

年6月にドム・シエロットの建設が開始された（Korczak 1913a：116）。ドム・シエロット建設のための寄付はその後も集められ，1910年から1912年までで約105,000ルーブル集まった（*Dziesięciolecie* 1918：58-65）。しかし建設費および土地代にかかった費用は合わせて114,000ルーブルであったため，9,000ルーブルの赤字となった（Wojnowska 2008：357）。

コルチャックは「施設を運営する技術は（中略）建物とそれが建てられている地域にかかっている」（Korczak 1920b：116）と述べるほど住環境を重視していたため，積極的にドム・シエロットの建設に関わった。エリアスベルゴーヴァによると，コルチャックは建設現場に何度も足を運び，目的に適った建物となるよう，大工の棟梁とも議論を重ねたという（Eliasbergowa 1946：238）。

完成した建物は地下と地上三階からなり，地下には風呂場，洗濯場，食料貯蔵室などがあり，一階には食堂としても利用した大きなホールと教室が三つ，二階には裁縫教室や音楽室，オグニスコ[35]用の部屋が二つと病気にかかった子どものための隔離部屋，三階には合計106台のベッド（男子50台，女子56台）が備わった男女別の寝室とヴィルチンスカの寝室，そして屋根裏部屋にはコルチャックの部屋があった（Korczak 1913a：118-119）。

当時の新聞には「最新の衛生の要求に応じ，最新の住宅技術を用いて作られた模範的な設備に感嘆する」（*Nowa Gazeta* 1913.2.27. nr 97：3）と書かれているように，ドム・シエロットは必要な設備が整えられ，衛生的にも養育的にも優れた建物であったと言える。しかし，コルチャックは後に「ドム・シエロットは子どもと職員に対する猜疑心のもと造られた」と非難する（Korczak 1920b：269）。そして，「全てが見え，全てが分かり，全てを防止することができる。大きな遊戯室―これは開放的な敷地であり，広場である。一人の用心深い人が全てを把握する。大きな兵舎のような寝室もこれと同様だ。このような建物は，素早く子どもを見分けることができるという大きな利点がある。（中略）そこには“落ち着ける隅っこ”がないということにうんざりする。喧騒，騒動，ぶつかり合い，子どもたちは不平を言う，当然のごとく不平を言うのだ」と続けて述べている（Korczak 1920b：269）。つまりドム・シエロットの遊戯室や寝室のように，全てを見渡せるような造りは子どもに対する不信の念の表れであること，またこのように全員が一か所に集められる場所では自分の空間を持つことができないということを非難している。後に“静寂の部屋”というものがドム・シエロット内につくられたが，これはコルチャックが，子どもたちには静かに過ごすことができる場所や落ち着いて取り組める環境が必要だと考えていたからだと言える。また実現することはなかったが，コルチャックは次のようにも考えていた。「将来，一階増築できるならば，ホテルのようなシステムにすることを私は支持するだろう。廊下があってその両側に小さな部屋がある…」（Korczak 1920b：269）。

このようにコルチャックは建設委員会のメンバーとして，ドム・シエロットの建設に積極的に関与した。限られた資金の中でより多くの孤児を受け入れるという課題と，それぞれが快適に安心して生活できる環境をつくるという課題に応えるのは至難の業であったと考えられる。しかし，ドム・シエロット設立のために寄せられた寄付，コルチャックの執拗な関わり，そして協会や建設現場の人たちの理解によって，完璧とは言えないまでもコルチャックの理想に近く，当時としては最新の設備が整った建物ができたと言えるだろう。

次節では1911年にドム・シエロットの院長に任命されたコルチャック（*Pamiętnik* 1912：18）が，開設に際してどのような意図を抱いていたのかについて見ていく。

(2) コルチャックのスピーチ―意図

1912年10月，フランチシュカインスカ通りの孤児院の子どもと新しく受け入れられた子ども合わせて約90人[36]が，クロフマルナ通り92番地に建てられた新しい孤児院ドム・シエロットで生活をスタートさせた。

ここではその4カ月後の1913年2月に開催されたム・シエロット開設式典でのコルチャックのスピーチを引用しながら，彼はどのような意図を持って開設に臨んでいたのかを明らかにする。また，それをどのような形で実現していこうとしたのかを，開設直後の状況について触れながら検討する。

このスピーチの中でコルチャックは，健康な子どもについて知ることと，働き手としての子どもの価値を研究すること，そして孤児院の精神を改革することの三点について述べている。少し長くなるが，この三点について述べているところを引用する。

> 私たちは病気の子どもや，バランスが崩れた状態にある子どもについて知っているが，型通りの発達をしている子どもについて知らなければならない。程度の重い障害について知っているが，わずかな偏りについては知らない。また，子どもを断片において，子どもの人生のほんの一部について知っているが，多くのタイプの子どものことや個性的な変化をする子どものこと，第一，第二の子ども期，成長期を通して，子どもが身体的・精神的発達の多くのプロフィールを見せるということについて知らなければならない。自然から手に入れたどの神秘も―この価値ある獲得物は，一部の子どものためだけではなく，すべての子どものためになり，またこの瞬間のためだけではなく，この先の100年のためのものとなる。
>
> 私たちの目の前で広がっている，子どもに関する大きな問題を注意深く追跡しながら，子ども解放の分野における力強い動きに私たちは気づいている。スイスやフランス，ベルギーにおける労働学校；アメリカやイギリスにおける未成年者の刑罰施設の自治；スカウトやスウェーデンの子どもクラブ，これらは第一級の重要性ある試みや探究であるというだけではなく―時代の特徴である。ドム・シエロット，それは労働の家，生活の学校として，働き手である子どもの価値を研究できるかもしれない。労働の範囲を測定し，限界を示すために。
>
> 養育施設[*5]の改革―人々は皮肉って言っている―，それは建物の改革であって精神の改革ではない。つまり養育施設の精神が良くないのだと。100年前に最初の子ども病院が設立された時，その結果は，それらを完全に諦めて閉鎖したかったほどに悲しいものであった。警戒心を二倍にし，悪の本質を突きとめて改革したのである，（すると現在は：大澤）有用であり，効果をもたらしている。何が養育施設の雰囲気を毒しているのか，なぜ家庭の子どもは順調に，元気よく発達するのかを見出さなければなら

> ない。これはすでに学問的意義だけではなく，大きな社会的意義のある課題である。なぜなら，ますます多くの子どもたちが養育施設で育っているからである（Korczak 1913a：116）。

一点目について，開設式典の翌月1913年3月に行われた小児科医の会議で，コルチャックは“クリニカ”[6]や学校医，開業医は子どもの発達の様子や日常生活におけるあらゆる兆候について観察しているわけではないので，そこでは「子どもの睡眠や食欲，過渡期，疲労，変わりやすい気分，貧血といった問題は十分に明らかにされていない」と指摘している。そしてドム・シエロットはそのような子どもの問題を明らかにする「実際の研究領域」，「健康な子どものクリニカ」だとし，そこでの観察から得たいくつかの印象―開設から半年しかたっていないため，それはまだ事実ではないとコルチャックは強調する―について述べたという（Korczak 1913b：501）。

開設当初からドム・シエロットでは，コルチャックとヴィルチンスカによって週に一度体重測定が行われた[37]。このことに関して，“孤児救済”協会の年次活動報告書には「体重の増加を観察することは，規則正しい子どもの成長を管理し，一般的，個人的な食事療法を決めることを可能にする」と書かれている（*Pamiętnik* 1913：27）。またコルチャックは子どもの睡眠時の様子を観察し，眠りについた時刻，目覚めた時刻，睡眠時間，入眠するまでの時間，眠りについた時の状態，目覚めたときの状態について克明に記録した[38]。コルチャックはこれら体重の増減，睡眠の様子，そして「微笑み・涙・赤く染まった頬」（Korczak 1919：361）など子どものあらゆる兆候を観察，記録し，その意味を理解しようとしていた。

以上のような子どもを科学的に観察し，彼らの発達の「神秘」を理解しようとする姿勢は，青年時代に養育者として参加したサマーキャンプでも見られた[39]。そして，この後執筆することになる著作の中でも繰り返しその重要性が主張される[40]。このようにドム・シエロットは子どもを観察し，正常に発達するためには何が不足していて何が過剰にあるのかを診断し，それを治療する“健康な子どものクリニカ”であるべきだとコルチャックは開設時に考えていた。

二点目について，コルチャックは1907年から1908年にかけて学術・文学・社会・政治的週刊誌“Przegląd Społeczny”（社会的展望）および“Społeczeństwo”（社会）で*Szkoła życia*（生活の学校）というタイトルの作品を連載した。当時ヨーロッパで広がっていた新教育運動の流れを追いながら，コルチャックは子どもの解放が実現されることを望んでいた。また，短期留学中に先進的な施設を訪問した経験を通して，子どもの正常な発達に役立つ施設をつくりたいと考えていた。「現存する，模範的で改革された学校―それは少数の有産階級のためではなく全人類の目的に役立つ学校である―」（Korczak 1907-1908：6）をもとに，コルチャックは理想とする施設の構想を*Szkoła życia*（生活の学校）に描いた。この作品の舞台である生活の学校は，「子どもたちが実用性のない薄っぺらい紙に書かれた実用性のない文字を学ぶところではなく，その代わりに人々がどのように生きているのか，なぜそのように生きているのか，どのように違った生き方ができるか，完全に自由な精神で生きるためには何ができ，何をしなければならないのかを学ぶところ」（Korczak 1907-1908：13）である。そして「労働，仕事―それは生活（原語życieには人生という意味もある）の同義語である」（Korczak 1907-1908：33）と述べているように，ここでいう“労働”とは主体的に生活すること，生きることであり，職業訓練や賃金を稼ぐ手段としての労働を意味するのではない。それは例えば，生活の学校の生徒と養育者が一緒に

なって生活の規則をつくることであった（Korczak 1907-1908：42）。また，「ここ（生活の学校：大澤）には規律はなく，あるのは社会化である。従順ではなく，共同生活や共同作業を調整する原則の必要性を理解することである」（Korczak 1907-1908：70）と述べられているように，決められた枠の中で規律正しく従順に生きるのではなく，自らが生活している環境に主体的に関わりながら，仲間と共同しながら生きることである。生活の学校では，このような“労働”，すなわち主体的にかつ共同して生きることを重視し，それを学ぶところであった。

フランチシュカインスカ通りの孤児院での習慣を引き継ぎ，ドム・シエロットでも開設当初から調理や配膳，洗濯，掃除といった日々の仕事から，下着の配布など週に一度行われる仕事，マットレス干しのような一回きりの仕事，雪かきのような季節の仕事など様々な“係り仕事”が導入された。また各階にはそれぞれの“係り仕事”の管理・統制をしたり，年少者の教育や手助けをしたりする責任者が置かれた（Korczak 1920b：288-289）。ドム・シエロットの職員は院長のコルチャックと養育主任のヴィルチンスカ，そして管理人，調理婦，洗濯婦のみであった。そのため，「百人の子どもを百人の働き手」にし，それぞれの「年齢や持っている力，質，才能，好みに応じて協力」することが必要であると，活動報告書には書かれている（*Pamiętnik* 1913：25）。ただし，ドム・シエロットの“係り仕事”は単なる職員の手伝いではなかった。どの“係り仕事”を担当するかは毎月末に子どもたち自身が話し合って決めるなど，子どもたちが主体的に取り組むものであり，各階の責任者のように，それを管理・統制するのもまた子どもたち自身であった。このようにドム・シエロットでは，それぞれの子どもが仲間や職員と一緒に自らが生活する場であるドム・シエロットの運営に主体的に関わること，つまり“労働”が重視されていた。

その後ドム・シエロットでは，サマーキャンプで試みられ，また*Szkoła życia*（生活の学校）の中で描かれていた，“仲間裁判”や“新聞”の発行，“好感度評価”など，様々な取り組みが導入されることになった。これら後に養育システムとして体系化される取り組み―その詳細については別稿にゆずる―を通して，子どもたちは“労働”することを学んでいく。そしてコルチャックは，この養育システムを通して，働き手としての子どもの価値，例えば子どもは“労働”にどのように関わることができるのか，またどこまで関わることができるのかといったことを研究しようとしていたのである。

三点目について，ドム・シエロットの建設が始まる3カ月前の1911年3月に，“孤児救済”協会は，ポーランド語によるユダヤ系日刊紙*Nowa Gazeta*に寄付を募るアピール文を掲載したが，それは以下のような文章から始まっている。

> 医者であるChartiezは「養育施設は修道院や兵舎の欠点と結びつく。つまり修道院は子どもの創造的な発意と対立する受動的な服従を求め，兵舎は乱暴な規則や単調な規律によって，子どもの正常で様々な側面を持つ発達を窒息させるからである」と述べる。弁護士であるHesseは「養育施設は，子どもは単に番号でしかない刑務所である」と述べる。教授であるHenryk d'Alméras は「養育施設は非衛生的で反自由主義で非人間的であるとさえ言えるだろう」と述べる。「養育施設の改革といえば今日までただ建物―つまり電気や換気扇，暖房器具の改革でしかなかった。では誰が養育施設から兵舎の精神を追い出すのか」と多くの人たちが尋ねて

いる（*Nowa Gazeta* 1911.3.22, nr 134：5）。

このアピール文の後半では，養育施設に向けられたこのような批判に対して“孤児救済”協会は，計画中のドム・シエロットでは，家族や親せき，孤児院以外の子どもたちなどとコンタクトをとれるようにし，施設内外の生活を切り離さないと宣言している（*Nowa Gazeta* 1911.3.22, nr 134：5）。

では実際はどうだったのだろうか。ドム・シエロットには，子どもたちが裁縫を学びながら衣服や下着類の仕立ておよび修繕を行う裁縫教室が併設されていた。またユダヤグミナに教室を貸し，初等教育を行う学級が二つ設けられた。これら裁縫教室や学級にはドム・シエロット以外の子どもも通うことができた（*Pamiętnik* 1914：25-26）。また土曜日には子どもたちは家族や親せきのもとに帰る習慣があった（*Pamiętnik* 1914：26）。このようにドム・シエロットでは，孤児院以外の子どもや家族と関われるようにすることで，院内と院外の生活を切り離さないように配慮されていた。このようにすることは子どもの発達，特に「精神面において重要な意味がある」と活動報告書には書かれている（*Pamiętnik* 1913：26）。

開設式典でのスピーチの時，当時の施設に対するこうした議論がコルチャックの念頭にあったと考えられる。このスピーチからは，多数の孤児を受け入れつつも，家族のもとで生活する子どもと同じような環境を保障することが必要だと感じていたことがうかがえる。それは例えば前節で見たように，50人の子どもがベッドを並べて眠る「兵舎のような寝室」ではなく，「ホテルのような」小さな部屋をつくることや，全体を見渡すことのできる大きなホールの他に，静かに落ち着いて過ごすことができる“静寂の部屋”をつくることで実現しようとしていた。また，それぞれの子どもの要求や思いに向き合うために“投書箱”が後に導入された。このようにして孤児院のような養育施設の子どもたちにも，家族のもとで暮らす子どもと同じような環境，つまり個の空間や個の対応を保障しようとした。サマーキャンプでの経験を通して，子ども社会の存在やその魅力に気づいたコルチャックは，共同生活や共同作業することを重視していたが，それと同時に，個として生きることも大事にしていたのである。

(3) 当時の孤児院とドム・シエロットの比較

このようにして設立されたドム・シエロットは2章3節で見た当時の孤児院と比べて，何が特徴的だったと言えるだろうか。最後にまとめてみたい。

一点目に子どもの捉え方があげられる。当時の孤児院では，“見張る人”，“監視する人”という意味を持つdozorca/dozorczyni―2章3節では教育者と訳した―のもとで子どもたちは生活をしていた。ここから明らかなように，そこでは子どもは監視される存在であった。一方，ドム・シエロットではdozorca/dozorczyniではなく，養育者という意味のwychowawczyniであるヴィルチンスカが子どもたちの世話をした。ここでは監視することではなく，養い育てることに焦点が当てられている。またコルチャックは開設式典のスピーチの一点目で，健康な子どもについて知らないということを指摘していたが，ここから，子どものあらゆる兆候を綿密に観察して理解すべき存在だと考えられていたことがわかる。さらにスピーチの二点目では働き手としての子どもという捉え方がされているが，これに関してコルチャックは*Szkoła życia*（生活の学校）の中で次のように述べている。「子どもたちは最も誠実で，最も無欲で，最も熱心で，最も精力的な働き手であるかもしれない」（Korczak 1907-1908：15）。ここでいう働き手と

は，当時の孤児院で一般に求められていたように，早く職に就き自立すべき存在ということではなく，自分の生活場所であるドム・シエロットを仲間や職員と一緒に運営する存在ということである。子どもは自分たちが生活する環境をより良くするために，“誠実”に，“無欲”に，“熱心”に，“精力的”に働くという確信がコルチャックにはあった。スピーチの三点目に関連して，当時の養育施設に対する批判を紹介したが，そこから，子どもは“受動的な服従”が求められる存在，“乱暴な規則や単調な規律”に従うべき存在，また単なる“番号”として捉えられていたことが明らかになった。しかしドム・シエロットでは，服従すべきものでも番号でもなく，先行研究で指摘されてきたように，子どもは人格を持った一人の“人間”であるというコルチャックの揺るぎない信念のもと，運営がスタートしたのであった。

二点目として，教育に対する考え方があげられる。当時の孤児院では，家族に頼ることができない孤児や貧困児は早くから職に就き自立できるようにと，男子には職人になるための職業教育が行われ，女子には使用人になるための家事仕事が課された。それと同時に国語や算数，宗教といった一般教育も行われたが，その内，秘密裏に行われたポーランド語やポーランド史の学習はロシア化政策に対する国民教育であり，若い世代に民族的精神を持たせるという目的があった。そこでは教育者の監視のもと，規律正しく従順であることが子どもたちに求められた。ドム・シエロットでも併設された裁縫教室や学級で職業教育や一般教育が行われたが，こうした教育以上に重視されたのは，コルチャックのスピーチの二点目にあったように，子どもの“労働”，つまり自らが生活している環境に主体的に関わりながら，仲間と共同しながら生きることであった。“係り仕事”を通して，またこの後に導入される“仲間裁判”や“新聞”の発行，“子ども議会”，“裁判評議会”といった様々な取り組みを通して，子どもたち自身が快適な生活環境をつくることが目指された。このような“労働”を重視する考え方には，子どもの将来，つまり職に就けるように準備したり，ポーランド社会を担うために教育したりといったように，来たるべき日に備えるだけでなく，今の生活を大事にするという視点があった。

三点目として，個の生活を大事にしようとしたところにドム・シエロットの特徴がある。当時の孤児院は100人以上の子どもたちが入所していたり，高齢者や貧しい人たちのための収容施設に併設されていたりと，子どもたちは無秩序に入り混じった環境で生活することを余儀なくされた。ドム・シエロットでも100人近い子どもたちが暮らしており，コルチャックはそこでの共同生活や共同作業を重視していた。しかし同時に，“静寂の部屋”や“投書箱”などを導入し，個の空間，個の対応を大事にしようとしていた。また孤児院の名前をドム・シエロット，つまり孤児の家としたところにも，いわゆる施設ではなく，家のようにプライバシーが保障されるような環境をつくろうとした思いが読み取れる。

5. おわりに

本稿では，まず19世紀後半から20世紀初頭におけるワルシャワの児童保護活動の状況について，1905年のロシア革命以降，それまで民間団体の活動を制約していたロシアの圧力が緩和され，組織および運営の自由がある程度認められるようになったこと，そのような中で“孤児救済”協会が設立されたことを指摘した。また孤児および貧困児のために通所型の児童保護施設

がつくられ普及していったが，それらは部分的な保護活動にとどまっており，コルチャックが望むように，子どもの生全体を保障するようなものではなかったと述べた。

次に，コルチャックが孤児院事業に着手していくことになった背景について，貧困地区での観察や児童保護活動への参加，西欧の施設訪問といった，それまでの経験を明らかにした。また“孤児救済”協会の活動についても明らかにし，コルチャックが協会の活動内容やその可能性に興味を持ったことを指摘した。

最後に，ドム・シエロット開設式典でのコルチャックのスピーチから，健康な子どもについて知ること，働き手としての子どもの価値を研究すること，そして養育施設の精神を改革することという三点の意図について紹介した。そしてこれらをもとに，当時の一般的な孤児院とは異なる，ドム・シエロットの特徴について検討した。

コルチャックが院長を務めた孤児院ドム・シエロットは，その設立において，子どもたちが主体的にかつ共同して生きることを目指していた。また，共同生活を営みながらも個の生活を保障しようとしていた。このような当時のワルシャワにおいて革新的ともいえる孤児院を，コルチャックは，ロシアの支配下にあり国からの援助が期待できない中で，西欧の他の国の例に倣いながら，実現しようとしていた。

今後は，本稿で踏み込んで論じられなかったユダヤ系の民間団体の活動について，その特性や，それがポーランド社会でどのような位置を占めていたのか明らかにする必要がある。また4章2節で紹介した三点の意図がその後どのような形で実現していくのか，あるいはいかないのか，その展開を，養育システムの検討を通して追っていくことを課題とする。

用語説明

*1 乳児施設（żłobek）…両親が共働きあるいは何らかの理由で世話をすることができない貧困家庭の3歳までの乳幼児を日中預かる施設。

*2 保護施設（ochrona）…貧困家庭の3歳から7歳の幼児が通う施設で，様々な遊び以外に，年齢に応じて，読み書きや体操，宗教の勉強をした。

*3 技術教室（sala pożytecznych zajęć）…貧困家庭の7歳から14歳の男子が通う施設で，大工，鍛冶，金具業，手工業といった職業教育の他，国語，算数，宗教などの一般教育が行われた。

*4 裁縫教室（szwalnia）…貧困家庭の7歳から14歳の女子が通う施設で，裁縫，料理，洗濯，アイロンがけといった家事仕事の他，体操，音楽，図画などの授業も行われた。

*5 養育施設（internat=zamknięty zakład wychowawczy）…孤児院や収容施設，病院など通所ではなく，入所を要する施設。

*6 クリニカ（klinika）…大学病院のように診断や治療以外に，研究や教授も行われる医療施設。

注

1 19世紀，ポーランド人との同権を求めるユダヤ人の知識層やブルジョワジーの中から，ポーランドに同化する人たちが出てきた。医者である祖父，弁護士である父を持つコルチャックもまた，ポーランドに同化したユダヤ出自であった（参考：フェリクス・ティフ編著／阪東宏訳『ポーランドのユダヤ人―歴史・文化・ホロコースト』（2004年）みすず書房）。

2　中村妙子訳『子どものための美しい国』(1988年) 晶文社や，近藤康子訳『王さまマチウシⅠ世―コルチャック先生のお話』(1992年) 女子パウロ会，近藤康子訳『もう一度子共になれたら』(1993年) 図書出版社がある。

3　1990年代にはコルチャックの伝記がいくつか出版された。代表的なものに，近藤二郎『コルチャック先生』(1990年) 朝日新聞社，近藤康子『コルチャック先生』(1995年) 岩波ジュニア新書，また第二次世界大戦中のコルチャックの生活を描いた井上文勝『戯曲コルチャック先生―ある旅立ち―』(1995年) 文芸遊人社などがある。またアメリカのジャーナリストであり作家でもあるベティ・J・リフトンの『子どもたちの王様―コルチャック物語』(1991年) サイマル出版会やウィーン生まれの児童文学作家モニカ・ペルツの『コルチャック―私だけが助かるわけにはいかない！』(1994年) ほるぷ社も邦訳，出版された。1995年に発足した日本コルチャック記念実行委員会 (現，日本ヤヌシュ・コルチャック協会) は，展示会や講演会，Webページ等でコルチャックの紹介を行った。

4　1989年に採択された国連子どもの権利条約に関して，ポーランドがその草案を国連に提出したという経緯がある。この草案の作成・審議にあたった人権委員会ワーキング・グループの議長であるA.ウォパトカは，その時に影響を受けた人物としてコルチャックの名をあげた (喜多 1993a：17-22, 喜多 1993b：76-80)。

5　塚本智宏『コルチャック　子どもの権利の尊重―子どもはすでに人間である―』(2004年) 子どもの未来社，「コルチャック先生の教育者教育　若い教育者へのメッセージ―著作からの抜粋・論文集―」『名寄市立大学紀要』2007年3月，「ヤヌシュ・コルチャックの子ども観と子どもの権利尊重の思想―子どもを人間としていかに愛するか―」『市立名寄短期大学紀要』2007年3月，他多数。

6　日本教育学会第72回大会 (2013年8月28日 (水)～30日，一橋大学) において「コルチャック子どもの権利論の歴史的位置―19-20世紀転換期ヨーロッパにおける子どもの権利思想・制度史の流れにおいて―」というテーマで報告。

7　小田倉泉「ヤヌシュ・コルチャックの“子どもの現在”への一考察」『保育学研究』2002年など。

8　代表的なものに近藤二郎 (1990年)『コルチャック先生』朝日新聞社や近藤康子 (1995年)『コルチャック先生』岩波ジュニア新書がある。

9　塚本智宏 の連載「コルチャック先生と子どもの権利―コルチャックの教育実践と子どもの権利」『子どものしあわせ』705-708号，2009-2010年を参照。

10　小田倉泉の博士論文『ヤヌシュ・コルチャックの生と教育思想に関する研究―子どもの権利思想に基づく教師教育論構築を目指して―』東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科，2005年3月を参照。

11　第一次世界大戦が起こった1914年から1918年までコルチャックは軍隊に召集され不在であった。

12　これらの史料の一部はポーランド国立図書館に，またコピーがコルチャック関連文書の収集・研究センターであるコルチャキアヌム (かつてドム・シエロットがあった建物は現在も孤児院として使われており，その建物の一室が研究センターになっている) に保存されている。また一部の活動報告書の序文や開設式典でのコルチャックのスピーチは，1992年から刊行が始まり，現在も続いているポーランド語版の全集*Janusz Korczak Dzieła* (コルチャック全集) に収められている。

13　一月蜂起で少し人口が減少したが (1863年―21万1千人)，翌年の1864年には約22万3千人に増加した。その後も増加し続け，1875年には30万人を超えた。1885年から1894年にかけては毎年4~7千人が増加，1897年には約60万に達した。1904年から1907年にかけては経済危機および不安定な政治により，移住する者が増加したためワルシャワの人口は一時的に減少するが，第一次世界大戦前には90万人以上が住んでいた (*Encyklopedia Warszawy* 1994：441-443)。

14　当時のポーランドでは一般に，イタリア，フランス，オーストリア，スペインなどカトリックの国家では，児童の保護は国家の問題であり，地方自治体 (共同体) や民間団体は補助的な役割を果たし，ドイツ，スイス，

デンマーク，スウェーデンといったプロテスタントの国家では，それは地方自治体（共同体）の義務であり，それゆえ保護の実施は共同体の手にとどめながら―そこに民間団体も参加―，国家はそれを援助していたと認識されていた（Koralewski 1918：146）。

15 1795年にロシア，プロイセン，オーストリアによる三度目の分割が行われた後，1807年にナポレオンによってワルシャワ公国が建国された。1815年のウィーン議定書により，ロシア皇帝を国王とするポーランド立憲王国が建国され，ワルシャワはその首都になった。その後，1830年の11月蜂起が失敗したことによって，1832年にポーランド立憲王国は実質的にロシアに支配された。

16 ロシア皇帝を国王とするポーランド立憲王国設立後の1815年，ツァーリ政権は内務・警察委員会（Komisja Spraw Wewnętrznych i Policji）を組織し，その第二課が慈善団体の問題を取り扱うようになった。1816年にはポーランド立憲王国にある病院の経営および衛生状態を調査する委員会（Komisja Rewizyjna Nadzwyczajna dla Miast Krajowych）が組織されたが十分に機能しなかったため，翌年，全体監督評議会（Rada Ogólna Dozorca）がそれに取って代わった。しかし健康上の問題や社会保障についての専門性に欠ける官吏で構成された。この評議会は，課せられた期待に応えることができず，1832年に解散した。その後1870年まで慈善施設や病院の管理・監督を行ったのが，中央保護評議会（Rada Główna Opiekuńcza）と詳細評議会（Rada Szczegółowe）であった（Mazur 1999：14-15）。中央保護評議会はロシア政府によって任命された官吏を長とし，市長，聖職者，建設と法に関する補佐人の他，医師や病院の後見人などからなり，病院および慈善施設の職員の任命やこれらの施設の管理に関する法規の発布，財産の管理などを行った。また特別評議会は，病院および慈善施設の後見人，医師，中央保護評議会によって任命された2名の市民からなり，病院および慈善施設の全財産を監督したり，これらの施設の経営を監督したり，あらゆる事柄に関して決定を下す権限があった（Mazur 1999：15-16）。

17 ワルシャワ以外の地域ではそれぞれの県あるいは郡評議会の管理・監督下に置かれた。

18 1902年の会員1687人（男性1242人，女性445人）の中には，貴族が38人，聖職者が52人，領事官が5人，医者が139人，弁護士が117人，公務員が178人，作家が118人，技師が42人，建築家が18人，公証人が26人，教授が28人，銀行家が19人，工場主が53人，実業家が56人，商人が102人，資本家が8人，年金受給者が46人，その他ワルシャワ市民等が225人いたという（Podgórska 1970：155）。

19 サマーキャンプへの参加人数は年々増加し，1900年以降は毎年3000人前後の児童がこの機会を利用した。サマーキャンプへの参加人数の変遷は以下の通りである。1882年―54人，1883年―84人，1884年―136人，1885年―1889年―200-300人，1890-1892年―400-500人，1893年―884人，1894年―1368人，1895年―1821人，1896年―1961人，1897-1900年―2000-3000人，1901年以降―3000人前後（Ciesielska 1997：303）。

20 医師や法律家，教育家らが，「主として，母性の責任感を喚起し，母親に精神的・物質的援助をすることで，若い世代の正常な発達に資する」ことを目的として組織しようとした団体（*Niedole dziecięce* 1882：257）。

21 どのくらいの数の民間団体が存在したか明らかではないが，例えば1913年にブリュッセルで開催された国際児童保護会議において，ポーランド王国における児童保護に関する報告がなされ，その中で193の様々な児童保護施設を保持する26の協会が列挙されていたと，当時の医者であるシェナイフは述べている。しかしそれはワルシャワとワルシャワ周辺地域に限られているため，ポーランド王国全体ではその数は2倍以上になるであろうと指摘している（Szenajch 1917：53）。

22 ユダヤ系の慈善団体の数について，1904年までは不明だが，1910年の時点で30の団体があったと見積もられている（Kępski 1993：208）。

23 ワルシャワ慈善協会の管理下にある乳児施設の数は，1892-1897年は1，1898-1899年は3，1900-1902年は5，1903年は4であった（Grotowski 1910：237）。

24 一日1コペイカの利用料が課せられたが，最貧困層の子どもは無料で利用することができた（Mazur 1999：86）。

25 ワルシャワで最初の技術教室（工房）は1879年につくられたユダヤ系男子のためのものであると思われる（Mazur 1999：103, Grotowski 1910：226）。

26 ロシア革命後の1905年に出された法令によりポーランド人に対する様々な制限が廃止されたが，その中でポーランド語による宗教教育やポーランド語教育についても述べられている（Kępski 1993：221）。しかし1905年の革命後も，ポーランド語やポーランドの歴史，文学などの授業は秘密裏に行われた（塚本 2006：81）。ロシア支配下にあった地域の教育については，塚本智宏「地下学校の教師―一九世紀後半～二〇世紀初頭ロシア帝国領ポーランドの教育―」（2006年）が詳しい。

27 *Niedole dziecięce*（子どもの悲運）（1882年）の目次は以下の通り。「まえがき／Ⅰ. 児童保護の問題に関する一般的見解／Ⅱ. 児童保護に携わる外国の団体および機関　1. 捨て子のためのホーム，2. 母性慈悲協会，3. 乳児施設，4. 保護施設および昼間学校，5. 職人の徒弟の保護，6. 工場で働く児童のための機関，7. 貧しい孤児や貧困家庭および罪を犯した家庭の児童を保護する機関／Ⅲ. ワルシャワおよびその近郊における児童保護の現状　1. 妊産婦の施設　2. 捨て子ホーム　3. 母親のための事務所と有料乳母　4. ワルシャワ慈善協会の保護施設と孤児施設　5. ワルシャワの聖カジミエシュ施設の孤児院　6. ルーテル派グミナの孤児院　7. 改革派ワルシャワ教区の孤児のための施設　8. ユダヤ教の孤児のための施設　9. 仕事場および工場で働く児童　10. 児童のための治療施設　11. サマーキャンプ　12. 児童の精神改善施設　13. 農業団地と手工業住宅の協会（Towarzystwo osad rolnych i przytułków rzemieślniczych）とその施設　14. 刑務所の児童／Ⅳ. 1. 子どもの友協会の定款の草案　2. この草案に関する解説」。

28 ワルシャワ慈善協会はこれら二つの孤児院の他に，慈善家たちのイニシアチブによって設立された孤児院も管理していた。その数は多い時で男子用5施設，女子用7施設あり，各施設の入所児童は10数人から100人以上と施設により，また年度により様々であった（Grotowski 1910：232-233）。

29 1902年の冬，土曜日と日曜日にコルチャックと共に無料読書室で本の貸し出しをしていたボビンスカが，当時のことを回想している（Falkowska 1989：73）。

30 協会が所有するキャンプ村3つのうち，ヴィルヘルムフカ（1901年建設）はカトリック系の男子が，ゾフィウフカ（1901年建設）はカトリック系の女子が，ミハウフカ（1902年建設）はユダヤ系の児童のためのもので前半2期は女子が，後半2期は男子が利用した。これら3つのキャンプ村には1シーズン（4期）を通してそれぞれ約600人の児童が訪れた（1期につき150人）。コルチャックは1904年と1907年にミハウフカの，1908年にヴィルヘルムフカのキャンプに参加した。この経験をもとに執筆したものに*Mośki, Joski i Srule*（モシキ，ヨスキ，スルレ）（1910年）や*Józki, Jaśki i Franki*（ユスキ，ヤシキ，フランキ）（1911年），*Jak kochać dziecko. Kolonie letnie*（子どもをいかに愛するか―サマーキャンプ編―）（1920年）などがある。

31 詳細は，大澤亜里「サマーキャンプと青年コルチャック―子ども集団との初めての出会い―」『教育福祉研究』第17号，2011年を参照。

32 1914年まで活動を続ける。

33 1901年は108人，1902年は180人，1903年は204人の児童が“同胞援助”協会の保護を受けていた（Wojnowska 2008：349）。

34 1910年は232人，1911年は241人，1912年は234人，1913年は224人，1914年は238人の児童が“孤児救済”協会の保護を受けていた。

35 オグニスコ（ognisko：団らんという意）とは，5-8人の孤児と貧しいユダヤ人家族が一緒に暮らす場所のこと。孤児たちの保護者役であるユダヤ人家族は協会の代表や孤児院の院長に協力することが義務付けられてい

た（Korczak 1913a：116, 352）。

36 新しく受け入れられたのは8歳から13歳の児童32人（男子19人，女子13人）。1913年4月1日の時点で88人の孤児がドム・シエロットで暮らしていた（*Pamiętnik* 1912：20）。

37 開設当初はコルチャックが男子を，ヴィルチンスカが女子の体重を量っていたが，後に実習生“ブルシスタ”がそれを担当した（Merżan 1987：31-32）。

38 これら体重増加のグラフや睡眠の観察記録は1923年から1924年にかけて雑誌“Opieka nad Dzieckiem”（子どもの保護）に掲載された。Korczak（1923）*Waga co tydzień*（毎週の体重）およびKorczak（1923）*Sen*（睡眠）を参照。

39 大澤（2011）で，子どもが朝起きてから夜寝るまで，そして眠りについてからも，コルチャックは子どもたちの様子を観察し，それをノートに記録したことについて触れた。

40 例えば，1919年に出版された小冊子*Momenty wychowawcze*（教育の瞬間）（日本語訳については，塚本智宏資料紹介・訳，鈴木（大澤）亜里共訳「ヤヌシュ・コルチャック著『教育の瞬間』」名寄市立大学紀要2008年を参照）や1920年に出版された*Jak kochać dziecko. Internat*（子どもをいかに愛するか―養育施設編―）などがある。

参考史料

Bek, J.（1916）*Opieka nad sierotami,* Księgarnia Polskiej Bernarda Połonieckiego, Lwów

Grotowski, Ż.（1910）*Rozwój zakładów dobroczynnych w Warszawie,* Księgarnia E. WENDE i S-ka, Warszawa

Koralewski, K.（1918）*Opieka społeczna — dobroczynność publiczna —,* Księgarnia F. HOESICKA, Warszawa

Korczak, J.（1899）*Mozaika podróżna IV Zurych*, “Czytelnia dla Wszystkich” 所収：*Janusz Korczak Dzieła tom3-1,* Oficyna Wydawnicza Latona, Warszawa 1994, 180-183

Korczak, J.（1901）*Dzieci ulicy* 所収：*Janusz Korczak Dzieła tom1*,Oficyna Wydawnicza Latona, Warszawa 1992, 43-227

Korczak, J.（1907a）*Mośki, Joski i Srule：Wrażenia z kolonii letniej w Daniłowie,* “Świat” 所収：*Janusz Korczak Dzieła tom5,* Oficyna Wydawnicza Latona, Warszawa 1997, 286-294

Korczak, J.（1907b）*Wrażenia z Berlina Korespondencja pierwsza,* “Krytyka Lekarska” 所収：*Janusz Korczak Dzieła tom4,* Oficyna Wydawnicza Latona, Warszawa 1998, 344-352

Korczak, J.（1907-1908）*Szkoła życia,* “Przegląd Społeczny”, “Społeczeństwo” 所収：*Janusz Korczak Dzieła tom4,* Oficyna Wydawnicza Latona, Warszawa 1998, 7-141

Korczak, J.（1912）*Forest Hill*, “Światło” 所収：*Janusz Korczak Dzieła tom4,* Oficyna Wydawnicza Latona, Warszawa 1998, 255-258

Korczak, J.（1913a）*Ku otwarciu Domu Sierot* 所収：*Janusz Korczak Dzieła tom14-1,* Instytut Badań Literackich PAN Wydawnictwo, 2008, 115-119

Korczak, J.（1913b）*Protokół XXXI posiedzenia pediatrów z dnia 20 marca 1913r.*, “Przegląd Pediatryczny” 所収：*Janusz Korczak Dzieła tom4,* Oficyna Wydawnicza Latona, Warszawa 1998, 501

Korczak, J.（1919）*Momenty wychowawcze* 所収：*Janusz Korczak Dzieła tom7*, Oficyna Wydawnicza Latona, Warszawa 1993, 361-426

Korczak, J.（1920a）*Jak kochać dziecko. Internat* 所収：*Janusz Korczak Dzieła tom7,* Oficyna Wydawnicza

Latona, Warszawa 1993, 137-219

Korczak, J. (1920b) *Jak kochać dziecko. Dom Sierot* 所収:*Janusz Korczak Dzieła tom7,* Oficyna Wydawnicza Latona, Warszawa 1993, 269-357

Korczak, J. (1923) *Waga co tydzień*, "Opieka nad Dzieckiem" 所収:*Janusz Korczak Pisma wybrane II,* Nasza Księgarnia, Warszawa 1984, 100-109

Korczak, J. (1923) *Sen*, "Opieka nad Dzieckiem" 所収:*Janusz Korczak Pisma wybrane II,* Nasza Księgarnia, Warszawa 1984, 114-121

Markiewicz, S. (1882) *Pierwsze letnie kolonje u nas:Sprawozdanie st. Markiewicz,* Gazeta Handlowa, Warszawa

Moldenhawer, A. (1890) *O opiece u nas nad dziećmi,* S. Lewental, Warszawa

Niedole dziecięce, (1882) Wydanie Staraniem Miłośników dziecięcego wieku, Warszawa

Nowa Gazeta (1909.6.6),nr 253, 3

Nowa Gazeta (1910.4.26),nr 188, 2

Nowa Gazeta (1910.6.27),nr 289, 3

Nowa Gazeta (1911.1.20),nr 32, 4

Nowa Gazeta (1911.3.22),nr 134, 5

Nowa Gazeta (1912.5.1),nr 200, 2

Nowa Gazeta (1912.5.18),nr 218, 3

Nowa Gazeta (1912.10.29),nr 499, 9

Nowa Gazeta (1913.2.27),nr 97, 3

Nowa Gazeta (1913.10.18),nr 452, 3

Pamiętnik Towarzystwa „Pomoc dla Sierot" w Warszawie za rok 1910, Druk. Gazety Handlowej, Warszawa 1911

Pamiętnik Towarzystwa „Pomoc dla Sierot" w Warszawie za rok 1911, Druk. Gazety Handlowej, Warszawa 1912

Pamiętnik Towarzystwa „Pomoc dla Sierot" w Warszawie za rok 1912, Druk. Gazety Handlowej, Warszawa 1913

Pamiętnik Towarzystwa „Pomoc dla Sierot" w Warszawie za rok 1913, Druk. Tow. AKC. S. Orgelbranda Synów, Warszawa 1914

Pamiętnik Towarzystwa „Pomoc dla Sierot" w Warszawie za rok 1914, Druk. Tow. AKC. S. Orgelbranda Synów, Warszawa 1915

Dziesięciolecie (1908-1917) Towarzystwa „Pomoc dla Sierot", Druk Tow. AKC. S. Orgelbranda Synów, Warszawa 1918

Połkotycki, W. (1896) *Domy sieroce*, "Zdrowie", XXI, 259-265

Sprawozdanie Zarządu Stowarzyszenia (1902) 所収:*Janusz Korczak Dzieła tom14-1,* Instytut Badań Literackich PAN Wydawnictwo, Warszawa 2008, 349

Szenajch, W. (1917) *Zasady organizacji opieki nad dziećmi,* Referat Hygieny Społecznej Dziecka, Warszawa

Ustawa Towarzystwa „Pomoc dla Sierot" w Warszawie (1907) 所収:*Myśl pedagogiczna Janusza Korczaka Nowe źródła,* Nasza Księgarnia, Warszawa 1983, 186-191

参考文献

Ciesielska, M.（1997）Geneza utworów：Mośki, Joski i Srule. Józki, Jaśki i Franki. Teksty z czasopism, 所収：*Janusz Korczak Dzieła tom5,* Oficyna Wydawnicza Latona, Warszawa 1997, 301-325

Eliasbergowa, S.（1946）*Krochmalna 92 — z historii Domu Sierot —,* 所収：*Wspomnienia o Januszu Korczaku,* Nasza Księgarnia, Warszawa 1981, 236-245

Encyklopedia Warszawy（1994）Wydawnictwo Naukowe PAN, Warszawa

Falkowska, M.（1989）*Kalendarz życia, działalności i twórczości Janusza Korczaka,* Nasza Księgarnia, Warszawa

Falkowska, M.（1997）*Matka sierot* 所収：Wilczyńska, S. *Słowo do dzieci i wycjowawców,* Z Kręgu Korczaka Tematy Ludzie Dokumenty, Warszawa 2004, 6-37

Góra, W.A.（1989）*Tradycje opieki i pomocy społecznej w Polsce,* "Praca socjalna", nr 2, 22-36

Kępski, Cz.（1993）*Towarzystwa dobroczynności w Królestwie Polskim,* Wydawnictwo Uniwersytetu Marii Curie-Skłodowskiej, Liblin

Lepalczyk, I.（red.）（1988）*Źródła do pedagogiki opiekuńczej, Tom I, Część pierwsza（do 1918 r.),* Państwowe Wydawnictwo Naukowe, Warszawa

Lewin, A.（1999）*Korczak znany i nieznany,* EZOP, Warszawa

Markiewiczowa, H.（2004）*Działalność Warszawskiego Towarzystwa Dobroczynności w kontekście pozytywizmu warszawskiego*, "Przegląd Historyczno-Oświatowy", nr 3-4, 95-106

Mazur, E.（1999）*Dobroczynność w Warszawie XIX wieku,* Instytut Archeologii i Etnologii PAN, Warszawa

Merżan, I.（1982）*Zarys dziejów Domu Sierot* 所収：*Janusz Korczak życie i dzieło — Materiały z Międzynarodowej Sesji Naukowej Warszawa 12-15 października 1978 —,* Wydawnictwa Szkolne i Pedagogiczne, Warszawa, 84-89

Merżan, I.（1987）*Aby nie uległo zapomnieniu,* Nasza Księgarnia, Warszawa

Podgórska, K.Z.（1970）*Warszawskie Towarzystwo Dobroczynności i jego wydział sierot i ubogich dzieci 1814-1914*, 所収：*Studia Warszawskie Tom VI, Warszawa XIX wieku 1795-1918 zeszyt 1,* Państwowe Wydawnictwo Naukowe, Warszawa, 141-184

Raczkowska, J.（1978）*Początki rozwoju zakładów opieki całkowitej w Polsce i uwarunkowania ich działalności,* "Problemy opiekuńczo-wychowawcze", nr 2, 77-82

Suzuki（Osawa）, A.（2010）*Teoria i praktyka pedagogiczna Janusza Korczaka-system wychowawczy w Domu Sierot i Naszym Domu*, Uniwersytet Warszawski Wydział Pedagogiczny, praca magisterska

Wojnowska, B. Przepisy, 所収：*Janusz Korczak Dzieła tom14-1,* Instytut Badań Literackich PAN Wydawnictwo, Warszawa 2008, 245-407

石川道夫（1997a）「子どもたちと生きるために―ヤヌシュ・コルチャックの教育論―」『教育新世界』23（1）, 20-26

石川道夫（1997b）「教育者コルチャックの祈り―"ただ一人神と―無信仰者の祈り"をめぐって―」『人間教育の探究』10, 87-99。

井上文勝（1995）『戯曲コルチャック先生―ある旅立ち―』文芸遊人社

大澤亜里（2011）「サマーキャンプと青年コルチャック―子ども集団との初めての出会い―」『教育福祉研究』17, 37-50

大澤亜里（2012）「ポーランドにおけるコルチャックに対する関心―戦後から現在に至るまで」『北海道の臨床教育学』1, 39-45

小田倉泉（2002）「ヤヌシュ・コルチャックの“子どもの現在”への一考察」『保育学研究』40（2）, 219-226
小田倉泉（2005）「ヤヌシュ・コルチャックの生と教育思想に関する研究―子どもの権利思想に基づく教師教育論構築を目指して―」東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科2005年度博士学位論文
喜多明人（1993a）「なぜ，ポーランドは子どもの権利条約を提案したのか―条約の意義についてアダム・ウォパトカ氏に聞く」『季刊教育法』92, 17-22
喜多明人（1993b）「なぜ，ポーランドは子どもの権利条約を提案したのか―アダム・ウォパトカ氏に聞く・その2（質疑応答）」『季刊教育法』93, 76-80
近藤二郎（1990）『コルチャック先生』朝日新聞社
近藤二郎（2005）『決定版　コルチャック先生』平凡社ライブラリー
近藤康子（1995）『コルチャック先生』岩波ジュニア新書
新保庄三（1996）『コルチャック先生と子どもたち―ポーランドが子どもの権利条約を提案した理由』あいゆうぴい
塚本智宏（2004）『コルチャック　子どもの権利の尊重―子どもはすでに人間である―』子どもの未来社
塚本智宏（2006）「地下学校の教師― 一九世紀後半～二〇世紀初頭ロシア帝国領ポーランドの教育―」所収：松塚俊三・安原義仁編著『国家・共同体・教師の戦略―教師の比較社会史』昭和堂, 65-84
塚本智宏（2007）「コルチャック先生の教育者教育　若い教育者へのメッセージ―著作からの抜粋・論文集―」『名寄市立大学紀要』1, 115-131
塚本智宏（2007）「ヤヌシュ・コルチャックの子ども観と子どもの権利尊重の思想―子どもを人間としていかに愛するか―」『市立名寄短期大学紀要』40, 1-16
塚本智宏資料紹介・訳／鈴木（大澤）亜里共訳（2008）「ヤヌシュ・コルチャック著『教育の瞬間』」『名寄市立大学紀要』2, 49-95
塚本智宏（2011）「ヤヌシュ・コルチャックの子ども・教育思想の歴史的形成（1890-1920年）―“子どもを人間として尊重する”思想の形成を中心に―」『名寄市立大学紀要』5, 35-47
樋渡直哉（1994）『子どもの権利条約とコルチャック先生』ほるぷ社
フェリクス・ティフ編著／阪東宏訳（2004）『ポーランドのユダヤ人―歴史・文化・ホロコースト』みすず書房
ベティ・J・リフトン著　武田尚子訳（1988）『コルチャック物語―子どもたちの王様―』サイマル出版会
モニカ・ペルツ著　酒寄進一訳（1994）『コルチャック―私だけが助かるわけにはいかない！』ほるぷ社
ヤヌシュ・コルチャック著／サンドラ・ジョウゼフ編著／津崎哲雄訳（2001）『コルチャック先生のいのちの言葉―子どもを愛するあなたへ』明石書店

Establishment of Korczak's orphanage Dom Sierot and Historical Background

Ari OSAWA

Key Words

Korczak, Dom Sierot, Warsaw, activity of child care, orphan

Abstract

The purpose of this paper is to clarify the establishment process of orphanage Dom Sierot where Janusz Korczak served as the director in the context of the child protection activity of Warsaw that existed under the Russia rule at that time. The following points can be pointed out from this paper. First, "Aid for Orphan" society that founded orphanage Dom Sierot was established at the time when a lot of private societies were organized and started the relief of the poor. Since the Russian Revolution in 1905, the Russian pressur on private societies relaxed and it made easily to organize society. Secondarily, from the latter half of the 19th century to the 20th beginning of the century, a lot of institutions for the poor children and orphan, for example nursery, day care center for child, room of useful classes for boys and sewing room for girls were founded. However, these institutions could not secure all of the life of the poor children and orphan. Because Korczak thought that it was necessary to support their all of life, he was engaged in the establishment of orphanage Dom Sierot. Thirdly, it can be said that Dom Sierot feature in the following points compared with the orphanage in Warsaw at that time. The first point was to have tried to understand the child. The second point was to have aimed that the child can live independently and cooperatively. The third point was to have tried to secure the private life of the child.